

第二十五丈己未栢揮不得爲人說
第二十六如有丈己所問當須如法
第二十七常護丈己顏多也莫人之失
摩訶薩不依般若靜慮精
羅蜜多起如是想如是之

第一六〇回 鶴見大学図書館貴重書展

瑩山禅師七〇〇回大遠忌記念

仏書・禅籍貴重書展

〔期間〕 令和六年四月一日（月）～二十七日（土）（日曜休館）

〔会場〕 鶴見大学図書館 一階エントランス（入場無料）

（展示期間中の開館時間については鶴見大学図書館ホームページをご確認ください）

用發識用根義顯勝得顯現
是色無縁慮用不能量度
主名唯心心所量度於境縁
亦冇量境之能今從能發
現之量依士釋也二見即



ご挨拶

この度、大本山總持寺御開山太祖瑩山紹瑾けいぎんしょうきん禪師の七〇〇回大遠忌を記念し、本学所蔵の仏書・禅籍を展示する「貴重書展」を仏教文化研究所主催にて開催することとなりました。

總持寺を開かれた瑩山禪師（一二六四～一三三五）は、道元禪師より数えて四代目にあたり、曹洞宗が全国へ展開して行く基を築かれた方です。そのため、曹洞宗では瑩山禪師を道元禪師と並ぶ「兩祖りよそ」として尊崇し、總持寺は、福井県にある永平寺と共に大本山に位置づけられています。

瑩山禪師の威徳を追慕する七〇〇回大遠忌は、全国から多くの僧侶及び檀信徒が参集し法要が勤修されます。こうした勝縁に際し、仏教ゆかりの「貴重書展」が開かれますことは、大変喜ばしいことでもあります。

また、本年は、本学園創立百周年の年でもあります。本学園は、大正十三（一九二四）年に總持寺御開山瑩山禪師六〇〇回大遠忌を記念し、「女性の自覚と向上」を目指した瑩山禪師の発願に基づいて創立されました。よって、本学では、長年にわたり仏教及び禅の思想・文化に関連する貴重書の蒐集に力を注いできました。その中には、横浜市有形文化財に指定されている奈良時代の古写経で、「興福寺永恩具経」と称する『大般若経』（巻第七十六～百八十）や、道元禪師ご真筆の「対大己五夏闍梨法たいたいこごげじやりほう」断簡（道正庵切どうしょうあんぎれ）があります。さらに、道元禪師の主著である『正法眼蔵』の写本、瑩山禪師伝関係の版本も所蔵されています。今回の「貴重書展」に際し、ぜひ、本学所蔵の仏典・禅籍をご鑑賞下さい。

学校法人總持学園

鶴見大学・鶴見大学短期大学部 学長

鶴見大学仏教文化研究所 所長

中根 正賢

展示目録

- 1 百万塔(付自心印陀羅尼一卷) 一基
- 2 賢愚經 卷第九斷簡 (大聖武) 額裝一葉
- 3 紺紙金銀字不空羼索神變真言經 卷第二十八斷簡 (中尊寺經) 軸裝一幅
- 4 仮名觀無量壽經 斷簡 軸裝一幅
- 5 大般若波羅蜜多經 卷第七十六、百八十 (永恩具經、横浜市指定文化財) 五卷
- 6 大般若波羅蜜多經 卷第二百八十五 (東大寺八幡經、横浜市指定文化財) 一卷
- 7 觀普賢經私記(來迎院如来藏本) 列帖裝一冊
- 8 五合目錄 一卷
- 9 仏説聖觀自在菩薩不空王秘密心陀羅尼經 殘本 (宋版) 折本一帖
- 10 宗鏡録 卷第四十九 (元版大藏經本) 折本一帖
- 11 大般若波羅蜜多經 卷第八十二 (嘉祿版) 一卷
- 12 仏説孟蘭盆經疏科文 殘卷 (泉涌寺版) 袋綴一冊
- 13 仏制比丘六物図 (五山版) 袋綴一冊
- 14 仏果園悟禪師碧巖録 十卷 (五山版) 袋綴五冊
- 15 佛祖正法直傳 一卷 (五山版) 袋綴一冊
- 16 対大己五夏闍梨法 斷卷 (道正庵切) 額裝二葉
- 17 正法眼藏 袋綴二十一冊
- 18 瑩山和尚傳光録 袋綴二冊
- 19 鼈頭箋註 伝光録 袋綴二冊
- 20 瑩山和尚清規 袋綴三冊
- 21 洞上太祖圓明國師行實圖會 袋綴一冊
- 22 柿經 (元興寺伝来) 二十七葉

解題

1 百万塔（付自心印陀羅尼 一卷）

一基

〔ひやくまんとう じしんいんだらに〕

〔百万塔〕 木製小塔

塔身部：高さ一三・一糎 底面径一〇・四糎

相輪部：最大径三・五糎、高さ八・二糎

〔陀羅尼〕 縦五・五糎、横三九・六糎

神護景雲四年（七七〇）以前制作

〔図書館登録番号 一三三三六七七〕

世界最古の印刷物と高く評価されてきた奈良時代文化の記念碑的遺産。近年仏国寺（韓国）にて発見された『無垢浄光大陀羅尼經』が八世紀前半の制作と言われる通りならば―異説もある―、百万塔に先行する。しかし伝来経路が明確であり、歴史文献による検証もなしうる点で、やはり時期の特定できる最古の印刷物としての価値は揺るがないであろう。塔中に陀羅尼を納めるのは、「各以一本置塔中而供養」によつて招福除災後世安穩を実現する『無垢浄光大陀羅尼經』の所説に従つたもの。『無垢浄光大陀羅尼經』には六種の陀羅尼を記すが、その内、根本・相輪・自心印・六度の四種を選んだ理由は未勘。なお経中に「六度」の語は見当たらない。

史料『続日本紀』宝亀元年（神護景雲四年、七七〇）四月一〇日条「八年乱平、乃発弘願、令造三重小塔一百万基、高各四寸八分、

基径三寸五分、露盤之下、各置根本・慈心・相輪・六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺、賜供事官人已下仕丁一百五十人爵、各有差」がその文証。現存する実物とよく符合する。「八年乱」とは天平宝字八年（七六四）九月に起こつた藤原仲麻呂の乱であり、鎮定後の平安を期して造塔が企てられた。小塔の外に一万基・十万基の塔も作られたが、法隆寺伝来の塔以外は全て散逸した。使用料紙・紙の加工法・印刷技術（木版か銅版か、摺刷か押捺か）・版種等、問題点は多数あり、議論が盛んに行われている。

2 賢愚經 卷第九断簡（大聖武）

額装一葉

〔けんぐきょう〕

紙本墨書

縦二七・四糎 横七・八糎

奈良時代写 伝聖武天皇筆

〔図書館登録番号 一〇八〇八九八〕

『賢愚經』は『賢愚因縁經』ともいい、中国北魏の慧徳・曇覚等によつて漢訳されたと伝えられる、六十九篇の説話を集成した全十三卷からなる仏教経典である。

展示書は巻第九「善事太子入海品第三十七」の内容を、白麻紙に香木の粉末をすき込んだ「茶毘紙」と呼ばれる料紙に薄い墨で界線を引き、一行十二字詰に大粒の文字で書写したものである。独特な書式や端正で重量感に溢れる大字で堂々たる風格は、東大寺に伝来

したことから「大和切」、また聖武天皇筆との伝承もあつて「大聖武」の名で呼ばれている。

国宝指定となつた東京国立博物館所蔵「賢愚経残卷（大聖武）」や、東大寺、前田育徳会、白鶴美術館に所蔵されている卷子本以外は、断簡（大和切）として掛幅仕立や古筆手鑑の巻頭を飾るものとして伝存する。

3 紺紙金銀字不空羂索神変真言经 卷第二十八断簡

〔こんしきんぎんじふくうけんさくしんべんしんこんぎょう〕

（中尊寺经） 軸装一幅

紺紙金銀字

縦二五・六糎 横五〇・二糎

平安時代後期写

〔図書館登録番号 一一九二一四四〕

『不空羂索神変真言经』は中国唐代の菩提流志ぼだいりゅうしによつて漢訳された全三十卷からなる密教经典である。展示書は卷第二十八「清浄蓮華明王品第六十七」の内容を紺色に染めた料紙に一行ごとに金字と銀字で交互に、一行約十七字で全二十八行に書写したものである。その優美な筆致などから平安時代後期の書写と思われる。銀字はやや黒ずんでいるが、金字はよく光沢をとどめ、そのコントラストが美しい。

この断簡は、その特徴的な書式と書風などから、「中尊寺经」と通称される「紺紙金銀字交書一切经」のテキストのうちの一紙だったと考えられる。金銀交書经はこのほか、伝慈覚大師筆とされる建曆寺本『法華经』、道風筆と伝えられる五島美術館所蔵『法華经』なども広く知られている。

ちなみに、本断簡は桐箱入りで、田中塊堂（一八九六～一九七六）による箱書には「紺紙金銀交書经中尊寺经断卷」（蓋表）、「浪華法眼 塊堂題（朱白文印）」（蓋裏）とある。塊堂は古写经・古筆の先駆的研究者として多くの業績を残し、また仮名書家としても著名な方であつた。

4 仮名観無量寿经 断簡

〔かなかんむりようじゆきょう〕

軸装一幅

紙本墨書

縦二五・六糎 横九・九糎

鎌倉時代後期写 伝後京極良経筆

〔図書館登録番号 一〇七五三三二〕

『観無量寿经』は、『阿弥陀经』『無量寿经』と並んで浄土三部经とも呼ばれ、東アジアでは広く愛読・信奉される仏教经典である。展示書は、漢文の『観無量寿经』を書き下し訓点を施した内容を、白界の引かれた斐紙に書写したものである。おそらく元来横幅十三糎程度の細長い粘葉装、丁の表面にあたると想定される。

力強い書風は、後京極良経（一一六九～一二〇六）の風格を彷彿とさせる、鎌倉時代後期の典型的な後京極様と思われる。仏典の訓み下しとは言え、研究的・草稿的書物ではなく、読誦もしくは調度に製作されたものと推測される。この種の典籍は鎌倉時代以降の例がほとんどなく、書誌学上からも国語学的資料としても貴重である。

5 大般若波羅蜜多經 卷第七十六～百八十

〔だいはんにやはらみつたきよう〕

（永恩具経、横浜市指定文化財） 五卷

紙本墨書

卷第七十六	縦二五・三糵	横七八二・三糵（十四紙）
卷第七十七	縦二五・三糵	横八八七・四糵（十六紙）
卷第七十八	縦二五・三糵	横八八四・一糵（十五紙）
卷第七十九	縦二五・三糵	横九三九・三糵（十八紙）
卷第一百八十	縦二五・三糵	横八四一・七糵（十六紙）

奈良時代写 天福元年（一一三三） 興福寺永恩加點

〔図書館登録番号 〇三一七七三六三～七〕

大般若経六百卷は般若經典群の集大成で、玄奘三蔵（六〇二～六四四）が最晩年に完訳したものである。展示書は、「永恩具経」と呼ばれる大般若経六百卷のうち、卷第七十六から第一百八十卷までの五卷であり、平成五年に横浜市教育委員会より「横浜市指定有形文化財」に指定されている。

「永恩具経」とは、興福寺の蔵司永恩が、鎌倉時代前期の貞永・天福（一一三二～三三）前後、かねて蒐集していた天平時代から平安時代初期までの大般若経六百卷の全巻にわたって朱の句点を施し、一具として自らの氏神である河内国玉祖神社に奉納したものである。本学所蔵の五巻すべてにも朱の句点があり、卷第七十六より百七十九までには卷末に朱で「句切了永恩」と記されるのみだが、卷第一百八十の卷末には、

天福元年癸巳五月廿六日興福寺偕馬道以東

為第二房句切了 永恩生年六十七

と朱書の奥書が記されている。

こうした加點奥書は十卷ごとに記すのを原則としたらしいが、卷第五百九十一には「貞永二年癸巳」の朱書があったという。貞永二年（一一三三）は四月十五日に天福に改元されているので、永恩の加點が卷序に従ったのでないことを知る。永恩具経は四十巻ほどの現存が確認され、雄渾にして秀麗な書法は見事であり、特に五巻が連続して揃っているのは極めて貴重である。

6 大般若波羅蜜多經 卷第二百八十五

〔だいほんにやはらみつたきよう〕

(東大寺八幡經、横浜市指定文化財) 一卷

紙本墨書

縦二六・二糎 横五二糎(第二紙) 全長八六二・五糎(一七紙)

嘉祿三年(一二二七)写

〔図書館登録番号 〇一五六一五七〕

展示書は、表紙は逸失したが本文の欠落はない。银杏形の鍍金軸を持ち、軸木には薬師十二神将・四天王の梵字と願をかける修字からなる梵字が十七字墨書されている。黄檗染めの料紙に、一紙二十七から二十八字行、一行は十七字で書写されているが、文字はわずかに藤原経の特色を残している。紙背には一紙ごとに「東大寺／八幡宮」の墨印(計十七顆)が捺されており、巻末には別筆による以下の奥書がある。

奉加 錢百文 尼善阿弥陀佛

奉加米一石御経蔵造營五百人之内比丘尼善阿弥陀佛

壽

「善阿弥陀仏」という比丘尼については不明であるが、墨印と奥書から、これは鎌倉時代前期を代表する写経「東大寺八幡經」のうちの一巻であるとわかる。

東大寺八幡經は諸家に分蔵されているが、現存写本の奥書によると、東大寺伽藍の安穩のため尼成阿弥陀仏が発願し、嘉祿二年(一二二六)から安貞二年(一二二八)四月十一日までに書写され、東

大寺鎮守八幡宮に奉納されたことが判明している。本巻の奥書から、嘉祿三年(一二二七)に善阿弥陀仏等五百人の寄進によって本巻を納める経蔵が造営されたという東大寺を中心とした南都の教団実情が伝えられる貴重な資料である。

7 観普賢經私記 (来迎院如来蔵本)

列帖装一冊

〔かんふげんきようしき〕

紙本墨書

縦二五・五糎 横一五・七糎

建保五年(一二二七) 禅寂写

〔図書館登録番号 一〇七七三七一〕

表紙は美麗な「雲母引地茶唐草文摺譜付」で、外題は打付墨書にて「□普賢經私記 如来蔵」、右下に同筆で「覚阿」とある。本文は楮打紙に墨書。内題「観普賢經私記」(二丁表)、尾題「普賢經私記」(二七丁表)。墨付二七丁・後遊紙一丁(二折七紙一三丁、二折八紙一五丁、残り各一丁は前後見返)。四周单边有界(押界)。七行二十一字前後。漢文(白文)。

【奥書】

一校了

本云

保元三年十月十日於白河御房手自書写之。此書慈覚大師草云々。三井本也。書本文字狼藉歟。沙門澄憲卅三建保五年八月十三日書校了。為補如来蔵之闕也。

沙門禅寂

以正本重可比較。(二七丁表)

或人云、此記慈覚大師記云々。

私云。広智菩薩奉借書籍於慈覚大師之目錄有

普賢私記。若此記歟。可尋之。 禅寂。(二七丁裏)

*句点を付した。

本書は、『法華経』の実践的な修行を開示する『観普賢菩薩行法
経』に関する書写本で、これまで本学図書館の貴重書展で二度の展
観がなされた(第一二三回・第二三一回)。

表紙題簽外題下の「如来蔵」という墨書から、京都大原の三文庫
の一つ来迎院如来蔵に旧蔵の書であると知られる。奥書によれば、
慈覚大師円仁が草したと伝えられる本書を、建保五年(一一二一
七)、来迎院の禅寂が、安居院の澄憲によつて保元三年(一一一五
八)に白河御房で書写された本をもつて校合したものとされる。

本書は、本学文学部教授であつた池田利夫氏により、鴨長明の廻
向に「月講式」を起草したという禅寂からの研究が進み、注目され
るところとなつた。禅寂(俗名は日野長親、兼光息)が来迎院五世
の如蓮房と判明したことで、貴重書としての意義は深まつたが、い
まだ詳らかならざることも残されている。表紙の右端下方の手沢を
表わす天台入宋僧「覚阿」の識語の存在が、「如来蔵の闕を補はむ
が為」と禅寂が記した真意を読み解く一つの鍵となろう。

禅寂識語からおおよそ二十年後の嘉禎二年(一二三六)、円仁所伝
の声明を伝える来迎院で、天台声明再興のための『魚山目録』が編
纂された。そうした同院における「宝蔵目録」の編纂事業が機縁と

なつて本書が搜索され、かの禅寂のもとで入蔵が果たされたのでは
なかつたか。その私記の扉を披けば、法会の次第書きに次いで、
『観普賢経』の経句やその他の要文を随所に引きながら、経全体の
組織が体系的に分科・整理された「科文」のごとき書とみられる。
果たして円仁草か、期すべきは詳細な本文研究であることは云うま
でもない。

8 五合目録

〔こうもくろく〕

紙本墨書

縦二七・二厘 全長二三六・〇厘

平安時代末写

〔図書館登録番号 〇三四四〇二一〕

『五合書籍目録』(佚名、配架名『五合目録』)と仮称する卷子
本である。平安時代末頃の書写で、惜しくも巻初を欠くが、法花疏
九点・顕章疏十二点・俱舎六点・伝記二十一点・講式十三点の国書
や請来書の諸書が、各々一合(函)に収められた五合分、六十一
点の目録で、書名に調卷や員数を添え、著者や撰者などに記述が及ぶ
ものもある。

かつて本学の母体である總持学園創立七十周年記念の蔵書貴重書
展で紹介され(於・丸善東京日本橋店、鶴見大学蔵貴重書展解説図
録『古典籍と古筆切』池田利夫氏解説、平成六年(一九九四))、
目録に刻された諸書が各研究分野の資となることで注目を集めた。

後に全文翻刻もされて（田島公氏『禁裏・宮家・公家文庫所蔵古典籍のデジタル化による目録学的研究』、「中世蔵書目録管見」、平成十四十七年度科学研究費報告書）、各分野の研究者により、記載の一書ごとに関する個別の考証もすすめられている。

試みに俱舎の合から「俱舎論本頌三卷上中下 有注 先師御注也」「須弥山図一卷」、伝記の合から「大唐三蔵取経記一部三帖一二三」「清涼伝一卷複 上下」「一結四卷（宋朝往反消息等一通 良史書札一通／寂昭往反消息一通 玄奘歴見国一通）」、「破損一卷天竺図歟」などを拾えば、須弥山世界から五天竺、五台山などに関する請来の要書を収めた最先端の宝蔵であったと知られる。

なかでも目を引く『玄奘三蔵取経記』は、現存するお茶の水図書館所蔵本（徳富蘇峰旧蔵）が知られ、印記から『高山寺蔵書目録』第五十五甲の「玄奘取経記二部」の一本（いま一本は大倉文化財団所蔵『大唐三蔵取経詩話』）にあたる海内の孤本として貴重であるが、本目録の記録からは、それとは別に伝来し所蔵された南宋版の存在が想起されよう。

いずれの宝蔵を記し留めた目録であろうか。現存部の端裏書によれば、当初は二合分の目録であったものを、「二合目六」の記載を消して紙を継ぎ、五合分の目録としたことが見てとれる。散逸した可能性のある連れが見いだされて果たして何合となるか、個別の書籍に関する考究とともに、これらを収めた宝蔵への興味は尽きない。

9 仏説聖観自在菩薩不空王秘密心陀羅尼經 残本

「ぶつせつしょうかんじぎいぼさつぷくおうひみつしんだらにきょう」

（宋版） 折本一帖

紙本木版

縦二八糎 横一一・四糎

十二世紀刊

〔図書館登録番号 〇一五六三七一〕

展示書は、二十三折が残存する折本、版式は、每版三十六行、每行十七字、半折六行からなり、版心には函の千字文・卷次・版次・刻工名が順次に刻まれている。表紙には「不空絹索神変真言經」とあるが、実際の内容は、前半の六紙が『仏説聖観自在菩薩不空王秘密心陀羅尼經』（全一卷）の第二紙から第七紙までの残巻（巻首と巻末それぞれ一紙は欠落）に、『不空絹索神変真言經』（全三十巻）第一巻の巻末にあたる二紙（第十三、十四紙）を繋ぎあわせたものである。

展示書は徳富蘇峰の旧蔵にかかるもので、印記と帙に書かれた識語によると、元々東福寺塔頭の三聖寺さんしょうじ宋版仏教所にあつたらしく、蘇峰は北宋版と断言している。両經の千字文や特徴的な版式や版心に刻された刻工名から、北宋版の「毘盧大蔵經」のテキストであることは明らかである。ちなみに、毘盧蔵とは、中国北宋政和二年（一一一一）から南宋紹興二十一年（一一五一）まで開板された私版大蔵經である。

10 宗鏡録 卷第四十九 (元版大藏経本) 折本一帖

〔すぎよろく〕

紙本木版

縦三〇糎 横一一・五糎

十三世紀刊

〔図書館登録番号 一〇八四〇二一〕

『宗鏡録』百卷は中国五代の永明延寿(九〇四〜九七五)が、インド・中国の大乘経論をはじめ、禅僧の語録、戒律書、俗書をひろく涉獵し、法相・三論・華嚴・天台を折衷して禅に融合させた大著である。展示書は元代刊本の普寧寺版大藏経テキストである。

普寧寺版大藏経は、元・至元十四年(1277)〔南宋景炎二年(1277)〕から同二十七年(1290)にかけて中国杭州の大普寧寺で開板された私版大藏経である。普寧寺版は南宋の思溪版大藏経の重版をめざしたため版式などは同じであるが、福州東禅寺版・開元寺版とも校合した善本とされている。

展示書は折本一帖、全二十四折からなる。赤褐色原表紙長くして全体を包み込む帙型折本の原形をそのまま留め、帙表に「宗鏡録巻第四十九」と打ち付けられている。版式は、每版三十行、毎行十七字、每半折六行、版心には函の千字文、冊数に続き「馬明勝」と刻工名が付刻されている。巻末の尾題の下に「綺九」とあり、「綺」の第九冊ということを示しているところにも普寧蔵の特徴が表れている。本書の末尾に、難字の発音を示す反切に続き、「徑山興聖

萬壽禪寺首座沙門慧元重校」という校記がある。識語の左下には「寶玲文庫」の朱印が捺されている。

11 大般若波羅蜜多經 卷第百八十二 (嘉禄版) 一卷

〔だいはんにやはらみったきよう〕

紙本木版

縦二六・二糎 横四五糎 (第二紙)

鎌倉時代前期刊

〔図書館登録番号 〇二九七七九〇〕

嘉禄版大般若とは、貞応元年(1122)から嘉禄三年(1132)に奈良興福寺で開版された大般若経六百巻のことである。展示書は、嘉禄版の版木を用いて、弘安八年(1285)に橘乙女という女性の発願によつて奉納されたものうちの一卷である。版式は一版二十四行、一行十七字、三、四巻に一卷の割り合いで、巻末に「弘安八年橘乙女」なる墨書がある。箱書には「吉野蔵王堂伝来春日版」とある。巻首の内題の下には「寶玲文庫」の朱印が捺されている。

12 仏説孟蘭盆経疏科文 残卷 (泉涌寺版) 折本一帖

〔ぶつせつうらぼんぎょうしよかもん〕

紙本木版

縦三〇・七糎 横一〇・八糎

永仁年間(一二九三〜一二九九)刊

〔図書館登録番号 一〇五三五四九〕

本書は、圭峰宗密(けいほうしゅうみつ) (七八〇〜八四二) が著した「孟蘭盆経」の註釈書、「孟蘭盆経疏」の語句を解説したものである。

展示書は、折本一帖、現存九折(厚目の楮紙六紙)、巻尾一紙を欠く残本である。表紙の外題には「孟蘭盆経疏科文」とあり、内題「仏説孟蘭盆経疏科分二」の下には「大宋餘杭沙門元照 録」とある。京都東山の泉涌寺開版の宋版の覆刻版である。泉涌寺は、寛元四年(一二四六)の『仏制比丘六物図』の開版を筆頭に律再興の祖俊苾(しゆんじよ) (一一六六〜一二二七) が将来した宋版を底本にして数々の教書を覆刻している。

13 仏制比丘六物図 (五山版) 袋綴一冊

〔ぶつせいびくろくもつず〕

紙本木版

縦二七・八糎 横一八・七糎

室町時代中期刊

〔図書館登録番号 一〇七三九〇四〕

本書は、比丘(修行者) 必具の六物である僧伽梨(だいえ)・鬱多羅僧(七条衣)・安陀会(五条衣)・鉢多羅(応量器)・尼師壇(坐具)・漉水囊を图示し解説したものである。

展示書は、やや厚手の楮紙に半丁七行、毎行十七字で書写されている。図六面、墨付全三十一丁。表紙は改装されているが、見返しに「持明院教誓」の手沢名があり、巻首に「三井家」の朱印がある。最終丁の裏面の巻末刊語によると、俊苾が宋で学んだ元照(一一〇四八〜一一一六) 撰の本書を弘宣するため、孫弟子道玄が寛元四年(一二四六) 泉涌寺で出版した覆宋刊本にあたる『仏制比丘六物図』の印板が湮滅したため、了珍が南禅寺で再刊したものである。南禅寺真乘院は大応派香林宗簡の塔頭で、宝徳二年(一四五〇)の成立とされている。彫版はやや粗い感じを受けると共に、泉涌寺版とは版式を異にしている。この南禅寺版の伝本は少なく、本書以外に大東急記念文庫本・東洋文庫本など五本が知られるのみである。なお本書の刊行年時は、真乘院成立の宝徳二年から、大東急記念文庫本にある東福寺百八十四世自悦守懌の識語にみえる明応四年(一一四五)の間とすることができる。

14 仏果園悟禪師碧巖錄 十卷 (五山版) 袋綴五冊

〔ぶつかえんごぜんじへきがらろく〕

紙本木版

縦二五糎 横一五・四糎

室町時代初期刊

〔図書館登録番号 〇二六八三六三、〇二六八三六四、

〇二〇三五二七〕

中世の禅宗寺院、特に五山と呼ばれる鎌倉・京都の主要寺院においては、鎌倉後期から禅宗関係の語録類及び外典と呼ばれる漢詩文書の出版が行なわれ、南北朝期に最高潮に達する。しかし室町時代に入ると、出版点数はやや減少に転じ、十五世紀半ば以降はむしろ地方の有力守護大名の保護のもとで、地方禅宗寺院における小規模な出版が各地で行われるようになる。これらを総称して「五山版」と呼び、日本の出版史研究や書誌学研究上の貴重な資料として重視されてきた。

展示書は、禅宗の宗門第一書とも称され、中国、日本の禅林では広く読まれてきた『碧巖録』十巻の五山版である。『碧巖録』は、北宋の雪竇重頤が禅宗灯史や語録から選んだ祖師の古則などに頌した「雪竇頌古百則」に対して、園悟克勤が垂示・著語・評唱を加えたもので、元の大徳四年（一二三〇）に初めて刊行された。日本では、南北朝前半に建仁寺天瀾庵玉峯正琳によって開板された元版の覆刻本が最初であったが、それ以来、京都、鎌倉の五山を中心に諸所の禅宗関係者より繰り返し出版された。

展示書の巻第五の巻尾には長文の刊記があり、巻第七、第九、第十の末尾には「玉峯刻梓」との刊記が刻み込まれていることから、本書は日本最初の刊本にあたる玉峯刊本の重版テキストであることが判明した。なお、本書はこの種の版の現存唯一の伝本である。

15 佛祖正法直傳 一巻 (五山版) 袋綴一冊

〔ぶつしょうぼうじきでん〕

紙本木版

縦二六糎 横一七・四糎

応永三年（一二九六）刊

〔図書館登録番号 一二九三三二一〕

本書は、鎌倉・南北朝期の禅僧、峰翁祖一が編纂した、過去七仏から西天二十八祖、さらに唐土は達磨から六祖、そして青原下は龍潭崇信、南嶽下は天童咸傑まで至る四十七名の禅僧を記す燈史『佛祖正法直傳』の五山版テキストである。表紙の左端に外題「佛祖正法直傳全」と墨書、墨付五十丁（半丁十行、一行二十字）、第五十丁裏面に「應永丙子孟冬下瀚／重命工刊行」と刊記がある。

五山版『佛祖正法直傳』は、もともと月庵宗光という禅僧が康暦三年（一三八一）に刊行したことが、応永十一年（一四〇四）重刊本によって知られる。しかし、本書はそれらと版式を異にするもので、これまで東洋文庫蔵本のみが伝えられる稀覯本である。そもそも五山版においては、日本人禅僧の著作を刊行することは、一部の著名な禅僧の語録を除くと非常に珍しく、同時に日本人禅僧の禅宗

史観を知る上で貴重な資料である。また、返り点・送り仮名等の訓点の詳細に記されており、当時の禅宗寺院に院における漢文訓読の実態を示す好箇の資料である。

16 対大己五夏闇梨法 断卷 (道正庵切) 額装二葉

〔たいたいごごげじやりほう〕

紙本墨書

縦二三・九糎 横一四・四糎

寛元二年(一二四四)写

〔図書館登録番号 〇三二七一九六、一〇五六一五九〕

入門したばかりの修行僧に、大己(先輩僧侶)に対する礼法を六十二条にわたり説示された「対大己法」(江戸期に編集された『永平清規』に納められる)の断簡で、道元禅師(一二〇〇〜五三)四十五歳、壮年期の気迫みなぎる唐様の筆跡である。道元禅師に随侍した俗弟子の木下道正が帰国後京に葉舗を構えた庵(現在の京都市上京区道正町)に所蔵されていたと伝えられるため、「道正庵切」とも称され、京都国立博物館蔵国宝手鑑『藻塩草』所収の切の裏面に当たる。

斐紙の一面に白界六行を施し十丁二十面より成っていた粘葉装の冊子と推定されるが、現存するのは本学に所蔵の二葉を含めて、わずか五葉と三行だけである。

本書巻末識語に当る断簡が出光美術館蔵国宝手鑑『見ぬ世の友』に収められ、「于時日本寛元二年甲辰三月二十一日」なる年記と「道

元(花押)」と署名までも見られるので、同じく自署を有する永平寺蔵国宝『普勸坐禅儀』と並び、極めて稀な道元禅師真筆墨跡の中で、自筆か否かを鑑定する上での根本真跡資料となっている。

17 正法眼蔵 袋綴二十一冊

〔しょうぼうげんぞう〕

紙本墨書

縦二七・三糎 横一八・一糎

元禄六年(二六九三)〜同八年(二六九五)写

〔図書館登録番号 一三四四六三三〕

道元禅師の著書は、数多い。展示書である『正法眼蔵』を始め、『正法眼蔵随聞記』『永平広録』『永平清規』等が知られている。その中でも『正法眼蔵』は、道元禅師の名著と位置付けられる。

『正法眼蔵』は、道元禅師の思想書であると同時に、信仰の書、嗣法の証しとして書写されその写本の数は多い。しかし、寺院の堂宇奥深くに秘蔵されることが常であり、一般の目に触れることは希有である。また、伝播の過程により七十五卷本、六十卷本、八十卷本、九十五卷本、十二卷本など、多くの系統に分かれる。本館所蔵の写本は、一四本(完本一二本、端本二本)を数える。これらは、昭和四八年より一〇年間に渡り図書館学を担当した、團野弘之氏の御遺族より御寄贈賜った。『正法眼蔵』書写の系統及び伝播を研究するための貴重な資料である。

展示書は、九十五巻本系統である。江戸中期永平寺において亀峰瑞泉が書写し、義禪に与えたものである。これに関しては、目録冊・巻一摩訶般若波羅蜜・巻二現成公案・巻三一顆明珠・巻十袈裟功德の各巻末に記される。また、各巻冒頭と巻末に丸型及び花押の朱印が押されるのも特徴的である。蔵書目録では目録冊一冊を含め二十一冊・九十六巻本とされるが、これは兎全本においては、偽撰とされる「陞座巻」を九十六巻目に加えているからであり、系統としては九十五巻本である。

18 瑩山和尚伝光録

袋綴二冊

〔けいざんおしょうでんこうろく〕

紙本木版

縦二三・九糎 横一四・四糎

安政四年（二八五七）刊

〔図書館登録番号 一三九五五一〕

總持寺開山瑩山禪師（一二六四～一三二五）の主な著作には、『伝光録』『瑩山清規』（能州洞谷山永光寺行事次序）『洞谷記』『報恩録』『坐禅用心記』『信心銘拈提』『十種疑帯』（十種勅問）等がある。

その中でも『伝光録』は主著とされるもので、曹洞宗の教えを伝えた釈尊より西天二十八祖東土二十三祖、そして道元禪師と懷奘禪師（一一八九～一二八〇）に至る各祖師の悟りの機縁、伝記、瑩山の著語と偈頌を記した書である。正安二年（一三〇〇）、瑩山三七

歳、加賀大乘寺住持時代に開示され、弟子達によって筆録されたものである。

その写本は、全国に僅か三十余本が知られるのみで、江戸後期の開版まで広く知られることはなかった。

展示書は、彦根清涼寺の仏洲仙英（二七九四～一八六四）が、幕末の安政四年、京都書肆の柳枝軒より二冊本（乾・坤）として開版したものである。その凡例によれば、大乘寺所蔵本（散佚）・永光寺所蔵本・仙英所持本（不明）・諸方明德書写の写本（不明）・無隱道費の序文が付された写本（不明）などを校勘したとされる。

本書は、安政六年に再刊され、版元を変え明治九年（一八七六）總持寺版、同十八年（一八八五）出雲寺版が出版された。さらに本書を底本として、同十八年に大内青巒が鴻盟社より刊行し、それを底本に諸嶽山版が刊行された。

19 龍頭箋註 伝光録

袋綴二冊

〔こうとうせんちゆうでんこうろく〕

紙本木版

縦二五・七糎 横一七・九糎

明治二年（一九〇六）刊

〔図書館登録番号 一三三四六六七〕

『伝光録』は安政四年、仏洲仙英が刊行するまで世に知られる事が無かった。その為、本書に関する研究及び註釈書は、江戸期存在し

なかった。しかし、明治期仏教研究の高まりの中、『正法眼蔵』と並び『伝光録』研究も盛んに行われるようになる。

明治中期、清水珊瑚『首書傍訓 瑩山伝光録』明治一九年（一八八六） 梶田勘助、吉田義山『首書傍訓 瑩山伝光録』明治二〇年（一八八七） 出雲寺文次郎、古田梵仙『鼈頭箋註 伝光録』明治二一年（一八八八） 森江佐七の三種の解説本が刊行される。

展示書は、古田梵仙『鼈頭箋註 伝光録』である。本書奥書に校閲人古田梵仙・鼈頭箋註著作寺島得一と記す。古田梵仙（一八三四〜九九）は、長野県松本市盛泉寺十六世、曹洞宗大学林専門本校（後の駒澤大学）で教鞭を取り、本書始め十五冊もの曹洞宗関係の註釈を著している。寺嶋得一（生没年不詳）の伝は詳らかでないが、本書を含め「佛教大家 實地演説」明治二一年、「曹洞教会修証義講話」明治二四年（一八九一）、「參同契宝鏡三昧纂解」明治二六年（一八九三）等の編集、註釈に関わっている。本書の註記は、主に寺嶋の行ったものである。

本書の内容は、語注・出典・解釈などで、それまで研究されていなかった『伝光録』について詳細な論考を加えている。

20 瑩山和尚清規

〔けいざんおしょうしんぎ〕

紙本木版

縦二五・六糎 横一八・七糎

延宝九年（一六八一）刊

〔図書館登録番号 一〇一五五九四〜六〕

本書は、瑩山が石川県羽咋市永光寺（ようこうじ）で定めた修行規則である。まず、「清規」とは、「清浄大海衆、規矩準繩」の略。禅宗修行僧の規矩を定めたもので、中国禅宗成立期の唐代に成立した。最初期の「百丈清規」は散逸し、宋代崇寧二年（一一〇三）開版の『禅苑ぜんえん清規しんぎ』が現存最古の清規である。同書は、道元も参照している。道元にも『知事清規ちじしんぎ』、『典座教訓てんざきょうくん』、『対大己五夏闍梨法たいだいごごしやがらひ』、『弁道法べんどうほう』などがあり、江戸期『永平清規』として編集された。

展示書は、まんざんどうはく 卍山道白が延宝九年に開版した「流布本」と呼ばれるものである。一般に『瑩山和尚清規』『瑩山清規』と呼ばれるが、古写本の内題に『能州洞谷山永光寺行事次序』とあることから、永光寺での規則であったことが知られる。

構成は、卷上「日中行事・月中行事・回向・疏」、卷下之一「年中行事」、卷下之二「坐禅用心記」である。こうした日中・月中・年中という時間区分の構成で規則を定めた清規は、それまで存在しなかった。道元の『弁道法』に日中行事が示されるのみであった。

「流布本」に先立ち、卍山の師である月舟宗胡が延宝五年（一六七七）に、卍山自身が前年の延宝八年に夫々開版するなど、この時期曹洞宗内において古規を学ぶ気運が高まっていた。

「流布本」は、応永三〇年（一四二三）、太容梵清書写本が底本となつてゐるが、卍山の加筆訂正箇所が多く、底本との相違も指摘されてゐる。

なお、『坐禅用心記』は延宝九年本から加えられたもので、それ以前の開版本にはない。

21 洞上太祖圓明國師行實圖會

袋綴一冊

〔とうじょうたいそえんみょうこうしきぎょうじつずえ〕

紙本版本

縦二二・九糎 横一五・一糎

明治二十六年（一八九三）刊 寶山梵成編輯

〔図書館登録番号 一三三九三三四〕

本書は、總持寺開山瑩山紹瑾禪師の御生涯をその事蹟とともに語り伝える行状記や行業記に類いする御絵伝である。内題より、「太祖弘德圓明國師行實圖會」（以下「行實圖會」と称する。曹洞宗において「太祖」と仰がれる瑩山禪師は、後村上天皇より「佛慈禪師」の諡号を賜り、後に安永元年（一七七二）、後桃園天皇より「弘德圓明國師」の号を加諡された。本書はその諡号を書名に採る。

内題の次行に「法孫比丘 佛鑑梵成編輯」とあつて、寶山梵成（福岡県博多東町、大宝山明光寺二十九世）の著作になる。明治二

十六年（一八九三）九月廿六日、東京書肆森江出版（東京府麻布、森江商店森江佐七）より版行された。奥付より、画工は松下尚悦、彫工は市川鎌次郎と知られる。

全五十一丁、冒頭に瑩山禪師の頂相が掲げられ、末尾には「曹洞宗大本山總持寺全圖」の一紙の絵図が織り込まれ、能登國鳳至郡門前村諸嶽山十境の景題とともに祖院の伽藍の風景が一望される。

頂相に次いで總持寺独住二世法雲普蓋（畔上椽仙）禪師の題辭があり、その後次ぐ目録により、「御父母嘗て一子なきことを憂ひたまふ事」の段から「御諡號の事」に至る事書二十段に、一部の段に附加された事書八段（「附」七段・「并」一段）を添えた構成が一覧できる。本文は漢字仮名交じりの文体にて、漢字に仮名訓を付す。本文の随所に二十一の絵図（詞書を伴う）を織り込みながら禪師の生涯が語られる。

現在、禪師の生涯を証す鮮鋭なる歴史的研究が進められる一方において、当該書は江戸時代末までに成立した伝記以後、近代に成つた伝記の一つに位置づけられる。概して伝記の記述には、世寿のことにはじまり、歴史的事蹟と相違する点が随所に見られるが、その編纂の背景にはそれを要とした時代の一端が刻まれており、かかる観点をもつてすれば、これもまた寺誌に資すべき貴重書であるといえよう。版行の前年にあたる明治二十五年（一八九二）、寶山は当代の畔上貫首の依嘱によつて『洞上伝燈講式』を著すなど（同二十年まで同貫首の下で後堂）、太祖禪師の御伝の編輯に関わつてい

た。当該の「行實圖會」の版行の背景には、当代の總持寺分離独立の動向がうかがえる。

禪師の御行業を示すものとしては、別に軸装による『常濟大師行狀圖』（總持寺宝物館所蔵）が、本書の版行を相前後する頃から、大正十三年（一九二四）太祖六百回御正當（ごしょうとう）にかけて数種存するが、そのうち明治四十二年（一九〇九）に明治天皇から賜った「常濟」の諡号を冠する行狀圖は、当該の「行實圖會」と同じ画工・彫工が制作に当たったことが知られるなど、各種の行狀圖との影響関係も認められる。

本書末尾に認められる「明治十年に至り、吾が日本曹洞宗の今日（こんにち）斯くまで隆盛なるも、偏へに國師の御餘澤なるに由り、兩本山の貫首故らに協議を遂げ、自今尊崇して太祖國師と稱し奉るべき旨を決定せられたり。實に然もあるべき御事なり」（句読点を付した）との記述は、明治十年十月二十日、瑩山禪師の称号が道元禪師と共に高祖國師・太祖國師と統一が図られたことを受けたことに思いを致した御伝の制作であったことを物語る。

22 柿 經（元興寺伝来）

二十七葉

〔こけらぎよう〕

木片墨書

縦二五〇三〇糎 横一〇三糎 厚〇・一〇・三糎

鎌倉時代後期写

柿經とは、「笹塔婆」ともいい、頭部を圭頭あるいは五輪塔形にした檜の木片に仏典の經文を墨書したものである。写經と造塔の両功徳を同時に行う目的と、奈良時代以来の板に文字を書く木簡の伝統の中で、平安時代後期に生まれた。写經と同様に一枚につき一行十七文字を書き、經筒、經函などに納めて埋められたか、お寺に奉納されるか、また川に流される場合もある。

展示書は、元々奈良元興寺極楽坊の本堂内に納められた、十四世紀頃に書写された柿經の一部である。各葉の表裏に一行十七字から二十字になる『法華經』などの經文が書写されている。